



毎日の詩



udauda

目次

旅	1
誤差	3
ひろいせかい	4
とっくに	5
絵画	6
堤防	7
台詞	8
台所	9
さなぎ	10
不自然	11
降りそうで	12
余韻	13
今日は何の日	14
材料	15
言葉の重み	16
日曜日の朝	17
減速	18
笑いすぎて	19
それぞれの時計	20
未来図	21
まね	22
したいこと	24
禁句	25
バス停	26
準備	27
気まずい	28
お酒	29
バトン	30
嘘つき	31
本能	32
言葉かと	34
散歩道	35

水やり	36
だからこそ	37
独りの時に	38
庭先	39
立ちながら	40
僕の雨	41
平凡	42
位置	43
呼吸	44
目に見えないもの	45
春一番	46
そうやって	47
見えない目	48
夜光	49
遠く	51
心を食べる	53
肉体	54
寝起き	55

旅

何処へ行こう

考えながら

何処かへ向かってる

見つけようと

旅をしてきたのに

見失いそうになることばかり

それでも一旦

歩き始めた足は

交互に僕を動かしている

にぎやかな街から

道は静かな

郊外へ続く

角を曲がり

偶然出くわした

夢に立ち寄る

誤差

神様が

僕らの 99 %を

思い通りに創っても

僕たちは

大量生産の過程で生まれた

1 %の誤差に執着する

泣きながら

笑いながら

時に 120 %という

表現を信じながら

ひろいせかい

いえのなか

ごきんじょのなか

まちなか

でんしゃのなか

がっこうのなか

かいしゃのなか

きゅうくつになって

へやのなか

まどをあけて

はじめてきづいた

ひろいせかい

とっくに

とっくに終わった感情に

引きずられて

弾けきれないでいる笑顔

とっくに失くした感情を

引っ張り出して

納めどころのない拳

とっくに捨てた感情に

義理さえ感じて

うなされている枕元

絵画

真っ白なキャンバスに

色を塗りたいかって

見えてくるものを知りたかった

あらゆるメッセージを描くことで

あらゆるメッセージを打ち消して

それでも見えてくるものを

堤防

寸前で

こらえている

押し寄せてくる気持ちに

流されないように

安定した自分を

供給するために

いっそ壊れてしまった方が

楽なのかもしれないな

新しい流れが

待っているのかもしれないな

そう思いながら

今日も堤防は

守られている

台詞

心をはかかってあげようと

覚えたはずの言葉なのに

増えすぎた言葉が

心をはかからなくしている

自分の口から出た台詞に

首をかしげる

台所

何も変わらない毎日だからこそ

増していく違和感

日々の戸惑いをまとめて

千切りしていく包丁

積み重ねては引っ張り出す

棚の中の皿の重み

さなぎ

芋虫みたく

さなぎになれない僕は

自分で壁を

作らなくちゃいけない

破り捨てた勢いで

羽ばたいていけるように

頑丈な殻を

作らなくちゃいけない

不自然

自然と生まれてくる

不自然な感情

他人にも自分にも

逆らいたくなる気持ち

自然と生まれてくる

不自然な感情

大事なものから順番に

壊したくなる気持ち

自然と生まれてくる

不自然な感情

体はここにあるのに

心はどこかへ駆けて行く

降りそうで

雨に気をとられながら

影ののしかかった道を歩く

降りそうで降らない

雲がもどかしく

懐かしい親友と話す

それぞれの人生の近況

弾けそうで弾けきれない

笑顔がもどかしく

来たるべき雨に備えて

控えめな表通り

「それじゃあ」と言って

最後かもしれないさよならをする

余韻

数えきれない瞬間を

巡らせて空は

僕らの背景にいる

雲も

風も

朝も

命だけを置き去りにして

去って行っても

体に残された

軽やかな流れの余韻で

僕はこの一日を歩いていける

今日は何の日

駅で差し出された

一本の花を

あっ、そうかと

納得して受け取れる日

綺麗に飾り付けられた

一軒一軒の家々を

ゆっくり眺めながら

家へと帰る日

配られる優しさに

意味を求めたりしない一日だから

知らない人たちがくれた幸せを

今日は遠慮なくもらって帰る

材料

太陽の光と

適度な雨

肥沃な土や

きれいな空気

長い時間に

一粒の種

どこからともなく

自然が持ち寄った材料で

生まれた名もない花

どこからともなく

疲れた人がやって来て

その香りの中で寝そべる

言葉の重み

無責任に言葉は

どこからともなく

浮かんでくるのに

口にすると

もれなく

ついてくる重圧

自分の言葉で

自分を追い込んでしまった

ぎりぎりまで

ごまかせなくとも

ここは

笑うしかない

日曜日の朝

朝食を作る

希望もない

ガラスを砕く

怒りもない

ただぼんやりと

= (イコール) している

日曜日の朝

めくり忘れた

カレンダーに気付く

減速

夕闇の中に

紛れ込めないでいる

得体の知れない感情

僕が昨日まで

悲しみと

呼べていた感情

帰りを急ぐ

車の慌ただしさの

すぐ傍で

僕の足取りは

あまりの軽さに

沈んでいる

笑いすぎて

笑いすぎて

涙が出る

悲しすぎて

可笑しくなる

分かりすぎて

分からなくなる

疲れすぎて

眠れなくなる

何でもありすぎて

何もない

何もないから

何かある気がして

おそるおそるカーテンを開く

それぞれの時計

大切な人と

さよならする時に

止まってしまった時計の針

また心に一つ

時計をしまう

別れの時間を指したままの

再び動き始めるときを待ちわびて

自分の時を黙々と刻む

一番大きくて寂しがりの時計

未来図

失敗から

余計なことまで

学んじまった

増えた知識が

補ってしまう

暗い未来図

知れば

知るほど

分からなくなる

親しくなれば

親しくなるほど

ぎこちなくなる

まね

まねをする

僕らはまねをする

ご先祖様の行いを

先人たちの生き方を

まねしようとしなくても

気が付くとまねしている

まねをする

僕らはまねをする

漢字の書き順を

式の解き方を

最短距離で

知識や技術を身に着けるため

僕らはまねをする

まねしながら

同じ道を歩きながら

いつか逸れる方法を探している

遠い昔の過ちまでも

まねしてしまわないように

したいこと

言いたいことは

もう誰かが言っている

でも 言いたいな

したいことは

もう誰かがやっている

でも したいな

ちっとも

新しくない

ありがちな日常を

誰よりも楽しく

過ごしてみたいな

禁句

禁じられた言葉が

鋭さを増していく

危うい光を帯びて

磨かれた沈黙が

僕を突き刺していく

遠い国の少年の眼差しと化して

バス停

溜め息は昨日へ流れていく

望みは明日へ先走る

僕は今日しか生きられなくて

バス停の前に取り残される

根拠のない後悔

触れられたような気がした肩

でも誰もいない

雨が降り出したので

傘を差す

バスはまだ来ない

準備

「私は幸せ」

いつだって心から

言う準備はできている

伝えるべき相手がいない

だから私は不幸顔

溢れかえる人波の中で

気まずい

告白じみた視線を送らないように

笑顔に皮肉が混じらないように

咳音が状況を風刺しないように

仕草に主張が入らぬように

気まずい部屋の中で

人は全身で黙っている

お酒

愚痴の一つでも

言わなくちゃ

体に良くないや

弱音の一つでも

吐かなきゃ

強くなれないや

涙の一つでも

流さなきゃ

思い切り笑えないや

お酒の一杯でも

飲まなくちゃ

それもできないや

バトン

孤独が覗き込む部屋は

夢さえも疑わしい

眠れない夜は続く

強く握りしめたバトンを

手渡す次の走者もない

僕は どうして走っているのだろう

嘘つき

もう何も触れないで

僕だって開けたことのない過去なんだ

もう何も聞かないで

これ以上嘘つきになりたくない

軽い話のやり取りを

突然重くしたりしないで

思わず心まで

こわばってしまう

本能

教えてよ

ごはんの食べ方を

空気の吸い方を

教えてよ

上手な眠り方を

明日の目覚め方を

教えてよ

人の愛し方を

目の前の子どもの育て方を

教えてよ

雷の音に怯える臆病を

思うより先に動く勇気を

教えてよ

まっすぐな欲望を

僕が見失った本能を

死ぬことを忘れて

生きていく方法を

生きることを忘れて

生きていく方法を

言葉かと

言葉かと思ったら

涙だった

愚痴みたいにこぼれていく

言葉かと思ったら

心だった

つぶやきみたいに漏れていく

散歩道

寒さで伸ばした背筋が

ぼやけていた今日を

見えやすくする

散らばっていた

時間と記憶が

一直線に繋がる

名前を呼ばれることのない

冬の桜の静けさに

包まれ足を止める散歩道

当たり前にしてることを

あえてやってみたくなくて

深呼吸

水やり

僕の心を

誰も褒めてはくれない

僕の心を

誰も叱ってはくれない

だけど心は求められている

体に見合った成長を

心の上を見上げて

雨は降りそうにないから

今日も自分でじょうろを傾ける

だからこそ

みっともない言葉だからこそ

さらけ出す価値がある

弱っちい言葉だからこそ

闘わせる価値がある

投げやりな言葉だからこそ

握りしめる価値がある

やせ細った言葉だからこそ

研ぎ澄ませる価値がある

死にかけの言葉だからこそ

息を吹き込む価値がある

すぐに使える表現だからこそ

使わない価値もある

独りの時に

独りの時に

言葉は

なくていい

解きようのない

問いかけが

頭を巡るだけ

心は

静かになりたくて

でも止まない

ざわめき

眠れなくて

起きれなくて

もう関わりたくもない

思い出に侵される

庭先

いくつもの葛藤を

小さな部屋に押し込んで

来たのは嗅ぎ慣れた土の上

突拍子もない風の後で

庭には穏やかさが残された

滑りも伸びやかな鳥の影

時が季節の訪れを

気配で知らせようとしていた

ありとあらゆる命が

生まれたがっていた

春がほどけようとしていた

立ちながら

この足は

大地に

甘えている

どんな僕も

地球は

受け止める

座るベンチの

見つからない

雑踏で

立ちながら

感じる

光の抱擁

僕の雨

僕の雨じゃ

花一つ育てられない

泥まみれの瞳に

小さな水溜まりを作るだけ

僕の雨じゃ

虹一つ映し出せない

太陽の温もりに

心ごと乾かされていくだけ

平凡

悲劇というほど

様にならない人生

喜劇というほど

オチのない人生

毎日を生きやすくするために

少しずつ夢を準備する

絶望に引き出されなくても

希望は持っておきたい

位置

「あったかい」と言える位置に

太陽があり

僕はのんびり昼寝ができる

「僕たちの」と言える位置に

地球があり

僕はぴんと背筋を伸ばす

「あのさあ」と呼ばれる位置に

君がいて

僕はどきっと後ろを振り向く

呼吸

言葉を放つとき

誰もがきっと息を吐く

だけど人は吸い込みたい

言葉で呼吸がしてみたい

心を決めるとき

誰もがきっと息をのむ

だけど人は吐き出したい

心で呼吸がしてみたい

目に見えないもの

目に見えないものを

僕は上手に使えない

投げたい時に掴みきれず

使いたい時に取り出し切れず

目に見えないものは

僕を上手に振り回す

目に見えるものに移って

僕の心に引っ掛かるのを待っている

目に見えないものを

僕は上手に確認できない

明日へ連れて行けない

目を覚ました朝の

ぼんやりとした空の中から

一つずつ探り当てていくしかない

春一番

心がざわめく

一本の木と同じように

冬が引き裂かれていく

痛みの音がする

時が掘り起こす命

命がもたらす温もり

風が作った隙間に春

激しい情熱をもって

訪れる季節を

窓越しに眺めながら

するするとお茶を飲む

そうやって

変わりゆく

私がついて

この体は

絶対を拒む

いつか死ぬ

私がついて

この体は

永遠を拒む

生きている

私がついて

この体は

病すら抱ける

見えない目

誰かが

電信柱の影から

見張っているんじゃないか

そんな不安

誰かが

遠く遙かな天から

見守ってくださってるのではないか

そんな安心

見えない目に

疎まれ

睨まれ

育まれて

見えない目を

いつか見返してやろうか

夜光

無理矢理

越えようとした

夜が

あったけど

自分で

はい上がらなくても

朝日は

やってくる

心を

焚き付けて

火のないところから

煙を立たそうとしたけれど

自分で

輝こうとしなくても

帰り道は

見つかる

車や

ビルが捨てていった

光をつなげて

家まで

遠く

雲を突き破り

そびえる山々が

地上の僕には

安らげる景色

あらゆる固体を

焼き尽くす星の炎も

地球の僕には

かわいい光

ふっと風に消えそうな

僕らの炎も

遠くからあんなに

美しかったら

眩さに

導かれ

静かな輝きに

願いを差し出す

心を食べる

心をほおぼると

笑顔になる

心を嘔み碎くと

涙になる

心を飲み込むと

苦しくなる

心を栄養にして

元気になる

心を空っぽにして

今日はごちそうさま

心を平らげて

一日が満ちる

肉体

世界中の悲しみを

独り占めできると思っていた

たった一つの肉体が知る

僕が僕であることの

絶望 希望

一人の人と

向かい合い吐息

寝起き

目を開く

目を閉じる

この世界にピント合わせて

止まっていた心が

体に流れてくるまで

もう少しぼうっとしていよう

古びたトースターから

引き出される

新しい朝食

匂いに釣られて

やって来た

今日という日に

毎日の詩

著 udauda

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
